

Title	インド・コルカタの都市祭礼の変容：カリ女神祭祀を中心として
Sub Title	The transformation of the urban festivals in Kolkata, India: the case study of Kalipuja
Author	渋谷, 俊樹(Shibuya, Toshiki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.71 (2011. ) ,p.99- 117
JaLC DOI	
Abstract	<p>The Popular cultures in South Asia have been constructed in the each region, influenced by historical events such as colonialism, nationalist movement, globalization. Modern Hindu urban festivals observed in the urban areas of West Bengal have also been changed from 18th century. This paper focuses on the diversity of the images of the goddesses and temporary shrines built on the street or the park during the autumn festivals in Kolkata city, and especially on the peculiarity of Kalipuja celebrated in Chetla located southern suburb of the city. Hitherto, the Transformation of Hindu popular cultures were explained by concept of "Sanskritization". It means the mobility in the caste hierarchy, in which lower castes or tribal groups imitate and adopt some parts of the upper custom. But the concept is not proper to explain the diversity of recent urban festivals.</p> <p>The aim of this study is, at first, to describe the variation and the fashion of the image and the temporary shrines observed in the festivals in terms of the landscape (Appadurai). At second, to clarify the relative peculiarity of Kalipuja conducted by Chetla Mercantile Committee, I will classify the type of Kali images according to my survey to the potter castes making most of the images be worshiped around the city and argue that their rituals are not corresponded with both Sanskritization and prevalent fashion.</p> <p>They organize the committee during only annual Kalipuja particularly on the post-slum area and declare a common identity relating Chetla area. 42 ritual communities are participated in the committee and pray each images. And several Kali images include the elements of local God or Goddesses, from where they were immigrated. Therefore, the main issue is not peculiarity itself of their Kali images at least, but will relate with their everyday's life in the post-slum area in the translocal and transnational city. But to consider why they have pride and attachment to Kalipuja, I introduced some historical landscape adjacent to the area.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000071-0099">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000071-0099</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# インド・コルカタの都市祭礼の変容

—カリ女神祭祀を中心として—

## The Transformation of the Urban Festivals in Kolkata, India

—The Case Study of Kalipuja—

澁谷 俊 樹\*

*Toshiki Shibuya*

The Popular cultures in South Asia have been constructed in the each region, influenced by historical events such as colonialism, nationalist movement, globalization. Modern Hindu urban festivals observed in the urban areas of West Bengal have also been changed from 18th century. This paper focuses on the diversity of the images of the goddesses and temporary shrines built on the street or the park during the autumn festivals in Kolkata city, and especially on the peculiarity of *Kalipuja* celebrated in Chetla located southern suburb of the city.

Hitherto, the Transformation of Hindu popular cultures were explained by concept of “Sanskritization”. It means the mobility in the caste hierarchy, in which lower castes or tribal groups imitate and adopt some parts of the upper custom. But the concept is not proper to explain the diversity of recent urban festivals.

The aim of this study is, at first, to describe the variation and the fashion of the image and the temporary shrines observed in the festivals in terms of the landscape (Appadurai). At second, to clarify the relative peculiarity of *Kalipuja* conducted by Chetla Mercantile Committee, I will classify the type of Kali images according to my survey to the potter castes making most of the images be worshiped around the city and argue that their rituals are not corresponded with both Sanskritization and prevalent fashion.

They organize the committee during only annual Kalipuja particularly on the post-slum area and declare a common identity relating Chetla area. 42 ritual communities are participated in the committee and pray each images. And several Kali images include the elements of local God or Goddesses, from where they were immigrated. Therefore, the main issue is not peculiarity itself of their Kali images at least, but will relate with their everyday's life in the post-slum area in the translocal and transnational city. But to consider why they have pride and attachment to Kalipuja, I introduced some historical landscape adjacent to the area.

---

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

## はじめに

南アジア各地の民衆文化は、植民地化、独立運動、グローバル化の影響を受けながら、地域毎の変容を遂げて来た。本稿は1990年代以降のグローバル化がインド西ベンガル州の Kolkata の都市祭礼に及ぼした影響を論じ、「伝統」の再構築の過程を検討する。その中でもチェトラ地区に見られるカリプジャ（**कालीपूजा**: カリ女神祭祀）の位置づけと、祭礼に際して様々なカリ女神像を祀る Kolkata 南部のチェトラ地区について考察する。この場合には、女神の像に現れる「植民地都市 Kolkata」の表象にも着目することになる。現在見られるようなインド・ Kolkata<sup>1)</sup> の都市祭礼は、18世紀以降、徐々に形成されてきたからである。

## I. 都市祭礼

## 1. Kolkata の状況

西ベンガル州の最大の祭礼はドゥルガプジャ（**दुर्गापूजा**: ドゥルガ女神祭祀）で、カリプジャがこれに続く。毎年9月中旬から11月中旬、雨季の終わりから秋の収穫期にかけて、様々な都市祭礼が行われる。カリプジャは、10月から11月頃の新月（**अमावस्या**: オマボッシャ）の日の深夜より数日間、西ベンガル州を中心に行われる。Kolkata 市内の路上や広場などには、1000ヶ所以上の場所に、儀礼（**पूजा**: プジャ）を組織するコミュニティ<sup>2)</sup> 毎に、仮設の寺院のパンダル（**प्यान्दल**）が建立される。パンダルは人の背丈もない小型のものから高さ10mを超えるものまであり、各々の中に1体のカリ女神像が安置される。プジャの間は、コミュニティ毎に親族や隣近所、仕事仲間などが招かれ、この間は「オティティ・ナラヨン（お客さんは神様である）」とされ、外来の研究者も同様で、振舞いを受け、世間話をし、愉しむのである。ドゥルガプジャを行うには、最低でも数万ルピーの費用がかかるとされる（2009年現在、1ルピー≒2円）。地元の週刊誌 *Saptahik Bartaman* 9月12日号には、2009年度は百万ルピー以上も費やすコミュニティが数十件に上るという記事が掲載されていた。

数日間の儀礼が終わると、市内だけでも1000体以上に上る全ての女神像が、コミュニティ毎のトラックで、市の西側を流れるフグリ河（ガンジスの支流）へと運ばれ、流される。河岸での別離の儀礼で、水中に姿を消していく女神像に、人々は「また来年も会おう」と声を投げかける。カリプジャやドゥルガプジャも含め、Kolkata の都市祭礼の形式には、大凡の共通点がある。「パンダルの建立」→「神像の安置」→「司祭によるプジャ（儀礼）の実行」→「神像との別離の儀礼」という過程である。

都市祭礼で神像を用いる形式は、主に18世紀頃、バラモンの王家や地方領主の間で行われるようになったとされる。特に20世紀初頭の独立運動の高揚を背景に大衆化し、分離独立前にはヒन्दウー至上主義集団の牙城となって数を増やしたという歴史を持つ（Dutta 2003）。こうした祭礼は、インドからの移民で構成されるアメリカや日本のインド人コミュニティの間でも毎年行われている。

Kolkata の都市祭礼の神像は、塑像を生業の一つとする職業集団の集落で作られている。最も有名で大規模な集落は、市の北部にあるクモルトゥリ（**कुमोरटुलि**）と呼ばれる区域にある<sup>3)</sup>。大部分の神像はクモルトゥリで作られ、市内外へと運ばれる。クモルトゥリ文化連合会によると、2009年度のカリプジャでは約6000体の塑像が作られたという。神像は、職人が竹と藁を用いてガンジス河底の粘土を用いて造形し装飾される。神像は各コミュニティが購入し女神として祀られる<sup>4)</sup>。そして儀礼の後には、また母なる聖河の土へと還るのである。

## 2. 問題提起

都市祭礼における変容の多様性について論じるために、インド社会の社会変動の分析の多く用いられてきた「サンスクリット化」について検討しておく。サンスクリット化とは、1954年にシュリニヴァスにより提唱された概念で、元々は下位カーストが上位カーストの神観念や儀礼から衣食住に至る慣習を模倣することで、社会的地位の向上を目指す動きを意味する (Srinivas 1987: 99)。また、サンスクリット化を社会集団ではなく女神の変容に限定して用いる立場もある。しかし、本論文で取り上げる事例には、この概念は役に立たない。つまり、本来の意味のサンスクリット化で唱えられたような社会的地位の上昇は女神を主神とする都市祭礼の担い手の間で達成されたかという点、結果的には何も変わらない。また、女神の変容に注目したとしても、パンダルで祀られる荒ぶる女神のドゥルガやカリが、「サンスクリット的な」慈悲深くやさしいパールヴァティやラクシュミーなどの女神に変容することはない。供物が動物から野菜に変化したともいうが、コルカタのパンダルでの動物供犠は数えるほどしか残っていない。プジャ（儀礼）における女神のサンスクリット化はほぼ完了している。むしろ、女神像に関しては、「美しく、煌びやかになる」「威厳を保ちつつ、かわいらしくなる」「他の文化の要素を取り入れる」など審美性を伴うファッショナブルな流行やトランスナショナルな変容が多く見出される。

一方、こうした変容の傾向とは異なる要素を孕むのが、チェトラ商人組合に属する40以上のコミュニティが行うカリプジャである。そこでは、供犠を受ける「憤怒の相」「老婆の相」のカリや、悪名高い植民地表象として知られる「ダカト・カリ」（盗賊のカリ女神）の他、ベンガルの「民俗神」、頭部だけで表象された「村の神」などを要素として埋め込んだカリ女神が祀られる。勿論、「シエト・カリ」（白いカリ）、「ショルノ・カリ」（美しいカリ）などの固有名詞を与えられた、美しい像への変容も見出され、外部からの影響は皆無ではない。この地区では、「サンスクリット化」とも市内の祭礼の変化の傾向とも一致しない女神を祀るコミュニティが小さな区域に数多く存在し、「チェトラのカリプジャ」という地域共通のアイデンティティを示している。チェトラの大部分のコミュニティは、30年以上、毎年同じ像容のカリ女神を礼拝している。問題は女神の像容の特徴自体に止まらない。プジャの担い手のチェトラ商人組合は、カリプジャの時のみに組織され、カリプジャの執行に強いこだわりを示す。一般的にドゥルガプジャが多い西ベンガルで、なぜチェトラの人々はカリプジャにこだわるのか。そこに人々が意識・無意識に表象しているのは一体何か。こうした問題に関する幾つかの論点を整理し、現段階における課題を明らかにすることが本論の大きな課題の一つである。都市祭礼に見出されるトランスナショナルな変化に対抗するチェトラ地区の特徴は、まず女神の像容に相対的に見出されると思われる。そこで、本論では、コルカタ市に広く見られるカリとドゥルガの神像を一般的に分類した上で、チェトラ地区のカリプジャの考察を行う。

## 3. 調査方法

コルカタの都市祭礼の調査は、2006年秋以降、毎年執行してきた。2009年には8月から10月までの3ヵ月半滞在し、チェトラの民家の一室に滞在して儀礼の調査を進めた。調査方法は、各所のポトゥアパラ（神像制作地）やチェトラに足繁く通い、神像職人への聞き取りを行い、各言語の新聞雑誌を購入してプジャに関する記事を収集することであった。儀礼の期間は、チェトラだけでなく、コルカタ市の多くの地域に建てられた大小のパンダルを記録して歩いた。コルカタ全体の概要を把握するためであ

る。ドゥルガプジャの4日間は、コルカタ市内を中心に体系的にパンダルを訪ねる計画を建てて、日没から翌朝まで、計250ヶ所ほどを訪ね歩き、カリプジャでは200ヶ所ほどのパンダルの女神像を見て歩いて地図上に位置を記録した。また、現地の研究機関やメディアに足を運び、情報を収集した。

インドの都市祭礼に関しては、近年になって急速に研究が展開し（外川 2003; 田中 2005; 三尾 2006; 八木 2006; 中谷 2010）、多様な文化の移動や流動、人々のマイグレーションの諸相、「地域性」(locality)の再生産、政治的イデオロギーによる文化の流用など多くの現象が、特定のコミュニティとの関係性の中で検討されている。これらの先行研究を視野に入れ、チェトラ地区の事例を検討しながら、都市祭礼の新たな展開を考えてみたい。

#### 4. 地域の概要

本論に入る前に、調査地であるコルカタについて簡単に概要を述べ、チェトラ地区の位置付けを検討する。コルカタは、ガンジス河とブラフマプトラ河が形成する世界最大のベンガル・デルタ上に位置する。コルカタ市の西を流れるフグリ河は、ガンジスの支流で、ベンガル湾に注ぐ。ベンガル地方は6月中旬から10月にかけては雨季で、大量の雨が降り、市内は水浸しになる。コルカタ市は湿地に囲まれていることに加えて、フグリ河とは逆の東側に傾斜しており、排水が悪く、過去にはマラリアやコレラなどの疫病が流行した。

コルカタは2001年に植民地時代の名称のカルカッタを現地名に戻した。地名の由来は、「カリ女神の地」を意味する「カリカタ」に求める説が有力で、現在のカリガト寺院の女神を意味するといわれる。1690年にイギリス東インド会社が商館を建てたのがカルカッタの始まりで、1774年から英領インドの首都となり、以後は植民地行政の中核都市となった。

20世紀後半からの独立運動が高揚し、イギリス政府は1905年にベンガル分割令を実施する。ヒンドゥーの多い西部とムスリムの多い東部を分割し、宗教対立を煽る狙いがあったが失敗した。この時カリプジャも抵抗運動として機能している (Urban 2005)。この結果、イギリスは首都を1912年にカルカッタからデリーに移す。その後、1947年のインド・パキスタンの分離独立によってベンガルは東西に分裂した。1971年には東パキスタンがバングラデシュとして独立し、大量の難民が流れ込んだ。州政府の与党は、1977年以降現在に至るまで、インド共産党が実権を握っている。

コルカタはインドの西ベンガル州の州都である。市の面積は約185km<sup>2</sup>、2010年の人口は513万8千人で、人口密度は27400人/km<sup>2</sup>以上である。19世紀半ば以降、鉄道網が整備され、1984年以降は地下鉄も開通した。行政上はコルカタ市当局 (Kolkata Municipal Corporation: 略称KMC) の管轄下であり、141の地区 (Ward) に区分されている。本論文の調査地であるチェトラはコルカタの南部の一つの区で、面積にして1km<sup>2</sup>程である。一方、コルカタの祭礼に使われる大部分の神像が作られるクモルトゥリ地区 (0.5km<sup>2</sup>弱) は、市の北部のフグリ河沿いに位置する。

#### 5. 2009年の都市祭礼

西暦2009年 (ベンガル暦1416年) の主要な都市祭礼の日付、神格の名、神像の製造数は、表1の通りであった。ドゥルガ、ロッキ (ラクシュミ)、シャマ (カリ)、ジョゴダットリ、シヨロシヨッテイなど様々な女神が多く祀られ、唯一の男神はビッショコルマである。祭礼は、一般のベンガル暦で太陽暦であるポンジカではなく、太陰暦に従って行われ、カリプジャの日はアッシン月30日、2009年は10

表1 西暦2009年の主な都市祭礼

西暦2009年	ベンガル暦1416年	神格の名	クモルトゥリ製造数
9月17日	バドロ月31日	ビッシュコルマ 男神	3000
9月25日	アッシン月8日	ドゥルガ 女神	3500
10月3日	アッシン月16日	ロッキ (ラクシュミー) 女神	5000
10月17日	アッシン月30日	シャマ(カリ) 女神	6000
10月27日	カルティック月10日	ジョゴダットリ 女神	1000
1月20日	マグ月6日	ショロショッティ 女神	10000

(出典: Benimadhab Bhattacharyya, *Panjika*, 1416)

月17日で、神像の数はショロショッティが最も多くて10000、カリはこれに次いで6000である。神像の数についてはクモルトゥリ文化連合会に訊ねて概数で示した。一般にはドゥルガプジャが東インド最大の祭礼といわれるが、ここで像の数が最も多いのはショロショッティである。ドゥルガプジャが最大といわれる理由は、女神の人気や、像の大きさ、消費規模に関わる<sup>5)</sup>。

カリプジャは、ベンガル外部からの移住者によって齋された「ディーワーリー」(ディーパーワーリー)と同日に行われることは重要である。祭礼の重層性が顕著に現れる。ディーワーリーはベンガルではドゥルガプジャに勝るとも劣らない消費規模を誇る祭礼で、ヒンドゥー教以外のジャイナ教やシク教も参加し、世界中のインド人コミュニティにおいても祝われる、グローバルでトランスナショナルな祝祭となっている。ヒンドゥー教の文脈では、叙事詩の『ラーマーヤナ』に基づいてラーマのラーヴァナ殺しを祝う祭りと説明される。しかし、一般には「光の祭り」と表現され、ベンガルでは、家々に吉祥神ラクシュミー女神を招く光の装飾が施される。ディーワーリーは一般にはラクシュミー(ロッキ)の祭礼の側面を持つが神像は用いられない。一方、10月3日の一日だけ神像を礼拝するロッキプジャが行われる(表1)。ディーワーリーもカリプジャも新月の夜に行われる祭礼だが、カリプジャは「シャマプジャ(夜の女神の儀礼)」の異名を持つ。各種メディアの広告はカリプジャを表に出さず、同日のディーワーリーを祝う。ヒンドゥー寺院のカリガトの本尊も、この日は菜食のロッキ(ラクシュミー)として着飾られ、普段の山羊の供犠を受け付けない。たった1日の間だが、血を好む荒ぶるカリは柔和な女神に変貌するのである。

## 6. 都市祭礼の起源と展開

都市祭礼の歴史を遡ることは容易ではないし、カリプジャの正確な起源は明らかではない。神像を用いる最も古い記録は、カリプジャではなくドゥルガプジャである。1606年にノディア県の王ボバノンド・モジュムダルが始めたこととされ、コルカタでは1610年に市南西部ポリシャ地域のライチョウドゥリ家で始められている(Dutta 2003: 30, Chaliha & Gupta 1990: 331)<sup>6)</sup>。伝承ではカリプジャとジョゴダットリプジャは、西ベンガル州ノディア県の王のクリシュノチョンドロ・ラエ(1720頃-1780頃)が広めたこととされる。王権を権威付ける儀礼であった。これらの女神のプジャは、当初、王家や大領主、富裕な商人の間で行われ、資金も全て彼らが負担していた。共同出資型のスタイルは、1790年のグプティパ

ラと呼ばれる地域のジョゴダットリプジャで、「バロアリ・プジャ」（12人の友のプジャ）という近隣のバラモンの住民を巻き込んで誕生した（McDermott 2009: 206）。王権儀礼から都市の民衆祭礼への動きである。一方、現在、最も頻繁に使用される「ショルボジョニン・プジャ（全ての人々のプジャ）」も共同出資型で、1910年にインド国民会議派により導入され、独立運動を目指してヒンドゥー教徒を動員する手段となった（Dutta A 2003: 49-51, McDermott 2009. etc）<sup>7)</sup>。ショルボジョニン・プジャを介して、現在最もよく見られる路上や公園で行われるスタイルのプジャが広まっていった。バロアリ・プジャもショルボジョニン・プジャも、現在では総称して「コミュニティ・プジャ」と呼ばれている。現在では、民衆の都市祭礼の中核を形成する。

## 7. コミュニティ

2009年の調査に基づいて、コミュニティ・プジャを執行する組織の様相を述べておく。現在では祭礼の単位はコミュニティと呼ばれる。これはインド英語で人々の集まりを指す用語で、カーストを指す言葉としても使用される。祭礼に先立ってコミュニティ運営の基本的な役割を決める。代表者であるプレジデント（সভাপতি: President）は、地域の近隣集団であるパラ（পাড়া: Neighborhood）の人々が集会を開き、相応の社会的地位にある人物を選出する。副代表（সহ-সভাপতি: Vice-President）はパラの中で高額な出資をした人々を選ぶことが多い。副代表は必ず1人必要であるが、何人でもなれる。書記（সম্পাদক: Secretary）がコミュニティの管理運営の義務を任される。そして会計（কোষাধ্যক্ষ: Treasurer）がチャンダと呼ばれる寄付金（চাঁদা: Subscription）などをまとめる。チャンダには、パラの会員（সদস্য: Members）から集める「義務的な寄付」と、商店や企業などから集める「自発的な寄付」の2種類があり、それぞれ領収書が異なる。チャンダの金額に応じて、企業や商店の広告は大小が決まり、パンダルの近辺の看板やコミュニティが発行する記念誌（Souvenir）に掲載される。

パラの内部の人々はプロティベシ（প্রতিবেশী: Neighbor）と称し、外部の人々をウポデシュタ（উপদেষ্টা: Adviser, Counselor）と呼ぶ。パラを単位として「内と外」が区別される。ウポデシュタはパラの外部のパトロンを含む。パトロンとは、コミュニティ・プジャの運営に助言や貢献を行い、ゲストとして招かれる人物であり、チャンダは徴収されないという。チャンダは基本的にパラの中の世帯単位に割り当てて徴収されるが、1つの世帯の人々が、それぞれ異なるプジャ・コミュニティにチャンダを支払っていることも少なくない。パラの地理的な範囲は同じ祭礼でも重複していることがあり、年ごとに変わることもある。パラは内と外を区別するが、毎年ごとにパラの領域は変化し、境界は流動的に変化すると言える。

現在では、路上や広場でプジャを行うには、コルカタ市局やコルカタ警察などに予め申請することが不可欠である。2009年度のドゥルガプジャでは約850のコミュニティが登録されている。こうした記録からコミュニティの活動の実態を知ることが出来る。

## 8. 女神像の分類

都市祭礼のための神像の多くは、クモルトゥリで制作される。多くの女神像が制作されるが、総じて2種類の型がある。都市祭礼として数日間祀る大型の像と、家庭などで通年祀る手のひら大ほどの小型の像である。前者は司祭を必要とし、後者は必要としない。ドゥルガには大型が多く小型が非常に少ないのに対し、ロッキ（ラクシュミー）は小型が多い。カリはドゥルガ以上の大型から小型まで分布が広

表2 カリ女神の像の型

型の名前（仮称含む）	像の特徴
1. ドッキナ・カリ型 <sup>8)</sup>	シヴァ神の頭頂部が女神の正面に位置する
2. シヤマ・カリ型 <sup>9)</sup>	シヴァ神の頭頂部が女神の右手の下に位置する
3. タラ型	シャクタ派の著名な霊場、タラピタのタラ女神の型。手足はなく、土壘に頭を乗せた姿。銀色か金色の皮膚で表象
4. カリガト型	カリガトのカリ女神の型。大きな土壘の頭に四本の手を持つ。三つの鋭く赤い眼、金色の歯と長い舌を持つ。黒い皮膚で表象
5. シヤマ・カリ+ダキニ、ヨギニ型	左右に2体の悪魔を殺そうとするダキニ、ヨギニと呼ばれる2体の魔女を伴う
6. ドシュモハピツダ型 <sup>10)</sup>	神話を起源とする、カリ女神の10の姿。パンダルでも10体で表象
7. ショッジャン・カリ型 <sup>11)</sup>	2本の腕で、肉と髑髏の杯を持つ。左足でシヴァ神を踏む。皮膚は黒く、ほぼ裸。名前の意味する通り、火葬場で祀られ、「危険な儀礼」を行う（クモルトウリの職人P氏、50代）



ドッキナ・カリ型



シヤマ・カリ型



タラ型



カリガト型

く流動性に富む。ドゥルガ、カリ、ジョゴダットリの表情も2種類ある。両目が耳付近まで伸びた「バングラ・サベキ (বাংলা সাবেকি: Bengali Traditional)」と呼ばれる顔と、英語で「アート (Art)」と呼ばれる若い女性や少女のような顔である（クモルトウリの職人P氏、50代男性）。神像の造形は、クモルトウリなど主要な神像制作地だけでなく、他の地区でも型には共通性がある。

今日の西ベンガル州で最も著名なカリ女神像は「ドッキナ・カリ」である (McDermott 2001)。主な特徴は、2本の右手で施無畏印 (অভয়: オボエ) と施願印 (বর: ボロ) を結び、2本の左手に刀と生首を持っていることである。額に縦に開いた第三の目、長く広がった髪、突き出された舌、生首を編んだ首飾り、切断された腕で作られたスカート、足元に横たわるシヴァ神といった姿で造形され、コルカタの広域で見出される。荒ぶる姿のこの形式は、チェトラに限らず、市内一般のパンダルのカリ女神像にも共通して見られる。

「ドッキナ・カリ」に対して、横たわるシヴァ神の頭が女神の手の下辺りに来る像の型は「シヤマ・



カリ」と呼ばれる。加えて、像の色は青、黒、灰色の3色を基本とする（クモルトウリの職人P氏、50代男性）。サリーや装飾品を豪華にする場合には、シャマ・カリ型を基礎にすることが多い。聞き取り調査をもとにカリ女神の型を分類すると、表2ようになる。タラ、カリガト、シャマ・カリ+ダキニ、ヨギニ、ドシュモハビダ、ショッシャン・カリなどの型もあるが数は多くない。基本型は「ドッキナ・カリ」と「シャマ・カリ」である。ドゥルガの場合は顔の表情を除くと、さら幾つかに分類できる<sup>12)</sup>。

クモルトウリ文化連合会は、これ以外の型はなく、クモルトウリで制作するドッキナ・カリ型とシャマ・カリ型以外の像は全体の2~3%に過ぎないという。コルカタ市内のパンダルに関しての実地調査で、カリの二つの基本型以外の神像は稀であった<sup>13)</sup>。パンダルに祀られる場合、型や飾りに関してより多くの変化が見出されるのは、ドゥルガプジャである。

## 9. 祭礼の変容

2009年における調査の内、市内で実際見たものを中心に、ドゥルガとカリなど女神像の変化とその特徴に関して整理すると以下ようになる<sup>14)</sup>。

### (1) 多様性と変化

カルカッタ大学に隣接するカレッジ・スクウェア公園のドゥルガプジャ・コミュニティは、15m以上に及ぶ高さの、ラージャスターンの「ハワー・マハル」<sup>15)</sup>をパンダルのデザインにしている。ベンガルだけでなく、南インドや、各地のヒन्दゥ寺院などの繊細なデザインを表現したものも多い<sup>16)</sup>。オリッサ州で有名なジャガンナートをモチーフにしたドゥルガも見られる<sup>17)</sup>。サントシュ・ミトラ・スクウェアのパンダルは、20m程の高さの自由の女神をモチーフにしている。あるコミュニティは、古代ローマ<sup>18)</sup>、古代エジプト<sup>19)</sup>、チベット<sup>20)</sup>、日本の仏教<sup>21)</sup>をパンダルと女神像のモチーフに取り入れている。ジュートを編んでヒन्दゥの神々や寺院をデザインした芸術的なパンダル<sup>22)</sup>など、モデルが特定できないものの、非常に凝った造りのコミュニティも数多い。

展示やイベントを併設するコミュニティもある。コルカタ南部ポリシャ地域のジャガラニ・コミュニティはHIV/AIDSに関する啓発活動をパンダルのテーマにしている。タゴールの詩を展示したコミュニティ、ベンガルの吟遊詩人ラロン・フォキルの歌を展示したコミュニティも見られる<sup>23)</sup>。観光地として名高いニューマーケットのコミュニティは、毎年カリプジャに力を入れ、著名な歌手やダンサーを招いている。

インドの人気映画がデザインのモチーフとなる事例は、1970年代には既に見られていたようである（Banerjee S. 2004: 58）。ただ、パンダルなどを飾るイルミネーションは1980年代から豪華になり、脱神話化されたデザインや、トランスナショナルなデザインは、1990年代以降に急増したという（Banerjee S. 2004: 59-60）。チョンドンノゴルのジョゴダトリプジャに関して、エッフェル塔やタイタニック号をパンダルのモチーフにしているとの報告もある（McDermott 2009: 209）。

### (2) 政治的側面の表出

「シオルボジョニン・コミュニティ」の成立自体が既に述べたように国民会議派によって導入された政治との関わりの深い単位であった。プジャの政治的流用は、今日でもしばしば見られる。シアルダ・アスレチック・クラブはベンガル農村部で猛威を振るマオイスト<sup>24)</sup>を批判し、国民会議派の支持を露骨に表現する。ムハマド・アリ・パークのドゥルガプジャ・コミュニティは、ククターやブルカを着

た「テロリスト」を無言で批判する。ダムダム南部のシヴァカリ・スポーツ・クラブは、カリプジャではムンバイのタージマハルホテルを大型のパンダルとしてデザインし、反テロを訴える。都市祭礼はヒンドゥー至上主義団体に限らず、コミユナルな政治運動に回収される可能性を潜在的に孕んでいる。

### (3) 環境問題の提起

地球温暖化を批判する展示を設けるコミュニティもある。近年メディアの間で、大量の神像を河に流すことによる水質汚染が懸念されている。また、ディーワーリーと同日のカリプジャでは、爆竹や改造花火の禁止を知らせる記事や貼り紙が増える。中でもカリプジャの別離の儀礼において大量に使用される爆竹は、「ノイズ・ポリューション」と呼ばれ、社会問題化されている。カリプジャに力を入れるチェトラ地区は、2008年、2009年の別離の行進の際には、警察による厳戒態勢が引かれた。一方で、豪華なパンダルの材料は、他の祭礼のためにリサイクルされるようになっている。

### (4) 経済的基盤の特徴

著名なコミュニティは、自動車会社や金融機関、保険会社、テレビ局や新聞社など地元メディア、政治団体などからの出資を受けて運営される。コミュニティの設営するテントはこうした企業の広告で溢れる。ドゥルガプジャやディーワーリーが近づくと、砂糖菓子、高価なサリー、家電製品、自動車やバイク、マンションや家屋、国内外旅行などの広告が、メディアや町を賑わす。消費社会との結びつきは非常に強い。金などのアクセサリの広告も掲載されるが、2009年度はこれらの祭礼を前にして、金の価格が暴騰した。

## 10. 小結

現在では盛大に行われている都市祭礼は、地方の富裕なバラモンの間で行われていた祭りが、独立運動と共に世俗化して展開してきた。1990年代の経済自由化が進む中에서도衰退するどころか、世界の急激な変化を表象する媒体として新たな表現を表出するようになった。これらは、グローバル化の流れの中で出現した表象の変化といえる。もともと女神の祭礼が古くないことは、儀礼コミュニティの年齢を表示する人々も意識していることである。多くのベンガル人が、カリとドゥルガが若々しく煌びやかになったと語る。「美しく、煌びやかになる」、「威厳を保ちつつ、かわいらしくなる」といった傾向が見出される。こうした審美性の変容の側面は、「サンスクリット化」だけでは理解できない。トランスローカル、トランスナショナルな状況の中で形成される重層的なランドスケープを通して、毎年再生産され流動化する、文化の再生産の問題として動態的に把握する必要がある。

## II. チェトラ地区の事例研究

### 1. 問題提起

これまで述べてきたコルカタ各地のカリ女神の変容や、ドゥルガプジャの煌びやかな変容の傾向とも異なるのが、チェトラのカリプジャである。現在のコルカタで一般に作られるパンダルや女神像は、その年だけのテーマを表現し、毎年異なるデザインに作り直して礼拝される。しかし、チェトラ商人組合が、自分たちの生活空間にカリプジャの間だけ設置されるカリ女神は、その多くが30年以上も毎年同じ像容で変化せずに祀られているという。歴史は浅いが、強固な連続性と連帯の意識が保たれている理由はなぜか。本論ではまずその特徴を浮き彫りにする。

## 2. 祭祀組織の基盤

クモルトゥリ文化連合会での聞き取りによれば、コルカタの都市祭礼に関わる組織の単位は、コミュニティとファミリーの2種類であり、それ以外の単位はないとされる<sup>25)</sup>。その意味ではチェトラでは、商人組合が主導権を握っていて、他の地域とは異なる祭礼基盤を形成している。組合が作成したパンダル・マップから判断する限りでは、チェトラ地区のほぼ全てを範囲としていることがわかる。商人組合は、カリプジャ以外の祭礼では活動しないのであり、まさに祭礼の執行だけを目的として結成される。チェトラの人々はよく、自ら「チェトラのカリプジャは、カルカッタで一番だ」と述べるが、他とは異なって毎年同じ形の神像を祀って祭礼を行うことの自負のようなものだ。その理由や動機に関しては自ら語ろうとはしない。カルカッタ都市圏の祭礼に関する類似のフレーズとして、「カルカッタのドウルガプジャはインドで一番大きなフェスティバルである」といって、コミュニティが過去に獲得したトロフィー等を誇示するものがある。これらの場合、一般には祭礼の基盤となる「地域性」の範囲は、都市(শহর: ショホル)、あるいは近所(পাড়া: パラ)が主体で、その中間的領域である地区(ward)ではない。チェトラは、この地区(ward)をカリプジャという一年に一回の一次的な機会にコミュニティとして浮かび上がらせる独自の「地域性」を機軸にしているという特徴がある。一方、チェトラ地区の中のパラも健在であり、「我らがプジャこそ(আমাদের পূজা: アマデル・プジャ)」という主張も聞かれる。

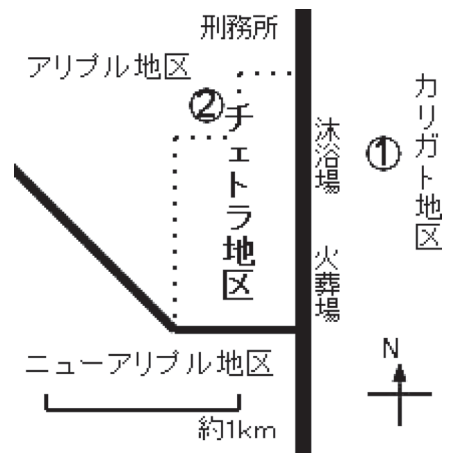
チェトラ商人組合の設立は1980年で、チェトラのカリ女神のうち、2009年時点で23周年を迎えるパラが4件確認されている。S.G氏(54才男性)の話として、カリ女神の祭りの頃になると、1986年4月に地下鉄が開通したことをよく思い出すという。地下鉄の開通に合わせて特徴的な祭礼を組織したコミュニティがあったと推論できる。

## 3. チェトラとカリガト

チェトラは、コルカタ南部の旧ホワイトタウンの一部で、東は16世紀頃までガンジスの本流であった水路で区切られ、カリガト寺院に接する。カリガトには現在でも渡し舟がある。北部と西部には、アリプルと呼ばれる旧白人街が広がり、南部は高層の新興住宅群ニューアリプルに接する。つまり、現在ではコルカタの中のインナーシティである<sup>26)</sup>。

しかし、この地域は植民地以前の記憶を濃厚に持つ土地であった。チェトラの東のカリガトにはコルカタ最大の火葬場があり、「ブリゴンガ(老婆のガンジス)」と呼ばれ、現在も信仰されている。ガトは沐浴場で火葬場も意味し、古きガンジス河の儀礼の記憶を止める土地であった(地図1: ①)。この地域はガンジス河の聖地として知られるバナーラスと同様な位置をコルカタでしめている。カリガト寺院は現在でも日々参拝する信者で溢れ、山羊の供儀が行われ、大地の荒ぶる女神につながるプジャを執行する。

一方、チェトラ(Chetla)は明らかに現代のベンガル語の発音ではなく、古くはシトラ(Sitola)だろうという説もある(西ベンガル州旅行会社勤務、50代男性S氏)。シトラと



地図1 チェトラ周辺

は、天然痘を司る女神の名前で、地区内にシトラ女神の祠が点在している。ヒンドゥー女神と連続性を持つものの、土地の地主神の様相を強く持つ。チェトラとカリガトは植民地化される以前の土地の古い記憶と信仰を伝える場所である。

現在ではカリプジャの間に限って、カリガトの本尊のカリは菜食の吉祥女神ロッキ（ラクシュミー）に変容して、普段の供犠は停止される。土地神への供犠が停止され、ヒンドゥーのパンテオンを上位に駆け上る。それはカリプジャと同日に、北インドを中心に広く行われる光の祭り「ディーワリー」の主神と同一視されるからであり、カリガトの女神は柔和な神に一時的に変貌する。いわゆる女神の「サンスクリット化」である。しかし、常設の祭場であるカリガト寺院ではディーワリーを祝うのに対して、同日の夜には古い聖河を挟んでカリガトに隣接するチェトラの5ヶ所の仮説のパンダルで、山羊が供犠される。ここで起こっていることは「逆サンスクリット化」であり、土着性への回帰である。表向きはヒンドゥー女神の祭礼を装うが、本質は天然痘を齎す荒ぶる女神なのであろう。カリガトとチェトラは二つで一つの世界であり、表と裏、昼と夜の関係ではないだろうか。共に、植民地化以前のこれは女神の二面性を表わすと共に、ヒンドゥーパンテオンと非ヒンドゥーの神の分離と融合を共に見せるとも言える。カリガトのカリはたった一日で、元の大地の女神の属性を強くもつかりに戻る。そして、チェトラのカリもまた、像が川に流されることで数日で消滅するのである。

一方、チェトラの西北には、現在も1774年に初代インド総督に就任したウォレン・ヘイスティングズ（1732-1818）の邸宅が佇む（地図1: ②）。彼の就任の翌年のから1912年まで、カルカッタは英領インドの首都であった。この地域には植民地支配の影が落ちている。イギリス政府は統治に際して、土地の人々にとって最も重要な宗教性に満ちた聖地を統御して、支配の正統性を確立しようと試みた。その結果、カリガトは植民地化に組み込まれたが、完全には統御できず、動物供犠は温存された。まして、チェトラは管理できず、土地の人々は年一回に血の供犠を欲する大地の女神を甦らせることで、土地の豊穡性、そして商売の隆盛を祈る女神として継続している。現在のチェトラのカリプジャで行われる「供犠」は、ベンガル人の間でも悪名高いとされるが、近代化と都市化によって人々の民俗に注ぐ視線が変わっただけのことである。チェトラ以外で動物供犠がほとんど行われないのは、都市化や近代化に馴化されたからであり、チェトラが連続性を維持しえたのは、コルカタの生と死を司る根源的な場所であるカリガトとセットになって、植民地化以前の記憶を保持する場所になっていたからである。

チェトラの人々は、儀礼の執行にあたっては「タラピタのタントラ行者」を要請する。ブラーマンからは異端視される人々にあえて儀礼を依頼するのは、彼らの呪力こそが土地の女神を甦らせると信じているからである。根源的な土地の生命力を維持し、活性化させるにはタントラの力を利用するしかない。政治統制を潜りぬけた宗教性は宗派や宗教の枠を越える。ただし、ムスリムがパトロンを務めるあるコミュニティでは、「お化け屋敷」をテーマとし、本尊とは別個に髑髏を持ったタントラ行者の儀礼を擲擯する展示を設ける事例もあり、こうしたパロディ化は、チェトラ商人組合が一枚岩になっていないことを意味する。

#### 4. カリ女神像の特徴

チェトラ地区の特徴を示すために、パンダルに祀られている神像の様相を検討する。チェトラ地区のカリ女神像の大部分は、カリガト北部のポトゥアパラにおいて、複数の職人たちの手で作られる。以下に示したのはカリプジャの時に作られるチェトラ商人組合の地図に掲載されたカリ女神の内うちの4体



チョンドロゴンタ



ジョフラ・カリ



ロクト・チャムンダ



ドゥルガ・カリ

の特徴を示したものであり、その特徴を検討する。

#### (1) 両義性と美しさ

一般に、「カリ女神は、恐ろしい女神ではなく、恐ろしさを取り除いて下さる女神である」と述べるカリ女神の信奉者もいる一方で、ロクト・チャムンダ、チョンドロゴンタ、カンカリニ・カリなどを案内する人々は、「恐ろしい」「怒っている」という表現を用いた。女神の二面性はこの土地の特徴と言える。チェトラ以外の都市祭礼では、現段階では憤怒の相や老婆の相へは見出されていないが、時代的な変化も含めて更なる調査を要する<sup>27)</sup>。シエト・カリ（白いカリ）やショルノ・カリ（美しいカリ）などの固有名詞を与えられた「美しさ」が強調される女神も祀られている。

#### (2) 土地神との同一視

チェトラでは、キリテッショリやジョフラ・カリといったベンガル内外の「村神」であるグラム・デボタが祀られるという特徴がある。タラ女神もまた村神で民俗神の性格を持つ。チェトラの名称自体が天然痘の女神であるシトラに由来するという説もあり、この土地のカリは村神との同一視が見られる。一方、外部者で神像作りのクモルトゥリ文化連合会の話者によれば、「パンダルでロキック・デボタ(民俗神)やグラム・デボタ(村の神)を礼拝することはない」というが、地元のチェトラでは見解が異なるのであろう。歴史的にみると数多くの村の神や民俗神がカリ女神と同一視されてきたことはよく知られている。

#### (3) 特異な神像

チェトラには、常設寺院のダカト・カリ（ডাকাত কালী: 盗賊のカリ）がある。また、右半身がシヴァで、左半身がカリである像や、右半身がドゥルガで、左半身がカリである像など、右半身がカリと異なる神である像が4体それぞれ異なる仮設寺院で祀られている。神像制作地のクモルトゥリや市内各所のパンダル調査では、こうした像は見出されなかった。この寺院の由来は、植民地時代にカリを信奉する盗賊団の噂が広まりその守護神とされた。当時のカリ女神と盗賊との関係の実態については現在でも議論があるが（Urban 2003）、地域的・物語的な根拠が明らかでなく伝承に過ぎないかもしれない。チェトラ南部の「ドシユムンドカリ」（10の頭部を持つカリ女神）は、その姿で毎年祀るようにとの「夢告」が縁起として語られている。これらは通常のカリからは逸脱した特異な神像といえる。

#### (4) 神像の特徴

一般に神像については、「姿形は変わっていても、究極的には同じシャクティの多様な現れである」という本質主義的な表現が広く用いられている。神像は、同じ河底の土から作られ、また同じ母なる河



ボンチョムンダ・カリ女神



ハリカト（断頭台）とジョッゴ（護摩を焚く祭壇）

へと還るのであるから、その現れは多様である。しかし、造形については暗黙の規範はあるようだ。新奇な像が作られる場合には、別個に「本尊」が安置される場合がある。ペーパークラフトのカリ女神や、オリッサ州のジャガンナートや日本の仏像をデザインに取りこんだドゥルガ女神像などの場合である。近年の動きとしては、チェトラで2003年に「ホヌマン・カリ」という猿の神のハヌマーン・カーリー女神が合体した神像が作られて、地元メディアが疑問視し、2007年には祀られなくなっていた。文字化された儀軌だけにとどまらず、塑像づくりと儀礼の執行に関しては、多様な表出を認めると同時に、制限するような、基本的な規範が共有されているのであろう。チェトラには女人禁制の制限を設けているパンドルがあるが、これについても地元メディアから疑問を投げかけられていた (*Anandabazar Patrika* 10. 29. 2008)。女神祭祀であるにも拘わらず、女人禁制とは奇妙であるとの論調であるが、メディアの論調と地元の意見は異なるので、認識のズレについては、今後、地元の人々による説明を検討する必要がある。

チェトラの女神像の変容を「サンスクリット化」で説明することは出来ないし、コルカタ都市圏の都市祭礼に見られるトランスローカル、トランスナショナルな変化の傾向とも異なる独自性を持つ。その理由はチェトラとカリガトが持つ、植民地化以前の「土地の力」の維持と関連していると推定される。

## 5. ボンチョムンダとその儀礼

2009年はカリプジャのうち特にボンチョムンダ (পঞ্চমুণ্ডা: 五つの頭の女神)・カリプジャについて調査を行った。カリプジャを調査対象に選んだのは以下の理由による。

- ①タラピタからタントラ行者が招かれて儀礼を行い山羊が供犠される。
- ②女神祭祀であるが女人禁制であり、この点について2008年に地元メディアから疑義がなげられた (*Anandabazar Patrika* 10. 29. 2008)
- ③民俗神として知られる「ボンチャノンド」を要素に含む。
- ④コラージュが独特で、典拠にあたる物語やオリジナルな像がない。

### (1) 神像に関して

パンドルは、毎年南向きに設置され、神像は一段高い舞台上に安置される。像全体としてはシャマ・カリ型に似るが、赤い皮膚と、色の異なる五つの頭が特徴的である。ボンチョムンダの足元に横たわる

赤い皮膚の男神は、シヴァ神の化身ポンチャノンドであるという。ポンチャノンドとは、ハウラ県を中心に、西ベンガル州南部の各県で人気の男の民俗神である (Niyogi 1987; 白田 2006)。しかし、注目すべきは、ポンチャノンドを女神の足元に表した図像はないことと、元来、ポンチャノンドの頭は五つではないことである<sup>28)</sup>。五つの頭は何れも若い女性のような愛らしい表情で、それぞれ髑髏の髪飾りをつけている。頭には名前があり、左から、ドゥマボティ (白)、シャマ (青)、チャムンダ (赤)、ロッカ (黒)、ボゴラ (黄) である。この色はポンチョブト (五大元素) と一致している。通常生首のモチーフで拵えたムンドマラ (生首の首飾り) は、白い髑髏である。「白い髑髏」は、チェトラのカリ女神にある程度共通して見出される特徴である。ポンチョムンダを含め、供儀を行うカリ女神のパンダルの天井からは、緑の葉を蓄えた蔦や長い木の枝が、逆さまに吊るされている。

## (2) プジャの道具と儀礼に関して

女神の依代の壺 (घट्ट: ゴト) は、金属製のものが6つ安置され、5体の各々の女神と、ポンチョムンダを表す。山羊は大小計4匹が供儀されて、翌日供物 (ଭାଗ: ボグ) として調理されて振舞われた。儀礼の特徴は以下の通りである。

- ① タラピタからタントラ行者がやってきて、動物供儀で血の生贄を女神に捧げる。
- ② 女人禁制でパンダルの外に竹の柵が組まれ、特に女性と子供は儀礼中に入れない<sup>29)</sup>
- ③ プシュパンジョリ (献花の儀礼) で女性達に渡された花は、司祭の手に渡され、彼が女神に投じる<sup>30)</sup>
- ④ 儀礼後の深夜、6つの壺を6人のアシスタントが頭上に持ち、ブリゴンガ (老婆のガンジス) で沐浴する。
- ⑤ 別離の儀礼の行進の掛け声は、「Bolo ponchomunda mai ki ! (Joi !)」である。

以上、指摘したように、これまでに参加したカリプジャと比べ、細かな点で異なっていた。特に、最後に神像をトラックに乗せて、チェトラ地区内を行進し、フグリ河のバブガト沐浴場へ別離の儀礼に向かう途中、「bolo ponchomunda mai ki ! Joi ! (母なるポンチョムンダ女神に勝利あれ!)」と叫ぶのは独特である。通例は「Bolo kali mai ki ! Joi ! (母なるカリ女神に勝利あれ!)」であるのに土地神の名前を呼ぶ。タラピタのタントラ行者による儀礼、民俗神との同化の仕方、五つの頭、六つの壺 (通例1つ)、女人禁制、独自の掛け声など、興味深い点がある。この事例は、チェトラ地区における土地神を实践として表出したものであり、住民の「地域性」のアイデンティティの核にあるものが現れたとも言えよう。ポンチョムンダ・カリは、22年間毎年チェトラで執行されてきたのであり、新しい伝統として定着している。

## III. 考 察

コルカタの都市祭礼の変容について、カリプジャを中心に、コルカタの市内とチェトラ地区のそれぞれについて、実態を検討してきた。本論が注目したいのは、チェトラ地区の独自性である。チェトラは商人組合という祭祀の期間にのみ機能する管理組織を作り出し、ひたすらカリプジャの独自の祝祭空間を作り出す。そこでは一時的な共同性が構築され、ヒンドゥーとムスリム、あるいは様々なカーストの差異を超え、共に供儀を行うことで、地域が再活性化する。この意味では、ここに現出するのは、人々の感情を開放するコミュニタス (comunitas) であり、参加者に連帯意識を持たせると共に、平等性に基づいた束の間の祝祭性を体験させる。チェトラでの儀礼の執行にあたっては、外部からタントラ行者が招かれて儀礼を行うパンダルもある。発端は現段階で明らかでないが、チェトラの人々は、1986年

の地下鉄開通に合わせ、地域起こしの一環として、同日のディーワーリーや、近隣にあったカリガト寺院、ダカト・カリなどの文化資源に着目し、村の神やタントラ行者の儀礼を動員したと考えられる。「様々な像容」や「タントラ」は、チェトラの「地域性」を再生産するための概念として機能しているが、人々の意図にこれ以上の一致は見られない。一方、タントラ行者と動物供犠を良く思わないコミュニティは地区内部にもあり、これらの要素を揶揄するテーマを併設するなど批判も内在している。

西ベンガルでは、雨季が終了する時期に重層的な女神祭祀が農村の収穫祭から都市祭礼に至るまで多様に展開する。その中でもカリプジャの担い手は、王権→英国統治時代の富裕層と在地領主→民衆といった歴史の変貌を遂げてきたが、シャクティを中核に持つ多様な重層的な女神祭祀の中に組み込まれてきた。10月から11月にかけては、ドゥルガ、ロッキ、カリの祭祀が展開するが、それぞれに地域のレベルと祭祀形態を異にする。ドゥルガは常設寺院をほとんど持たず、夫のいるカイラスから子供を連れて年に一度里帰りする「来訪神」と観念される。ドゥルガは中庭を持つ旧領主宅やコミュニティにおいて祀られ、ロッキはドゥルガを祀ったパンダルや旧領主宅の他、一般家庭でも祀られる。そしてカリは植民地時代から常設寺院を中心に祀られ、20世紀に入って独立運動と共にパンダルや一般家庭でも祀られるようになった。現在では旧領主宅で礼拝されることは少ない。普段は血の供犠を要求するカリガトのカリ女神は、ディーワーリーの間のみ、カリプジャの日には菜食のロッキに変貌し、北インドに共通する柔和な女神に一時的に変容する。女神の「サンスクリット化」とでも言うべき現象である。ただし、カリのパンテオンの上昇は一日で元の血に飢えたカリに戻る。カリガト地区の人々の社会的地位の上昇にはつながらず、真の意味での「サンスクリット化」とはいえないのである。一方、チェトラ地区ではこの日は、血の供犠を受ける憤怒の相のカリの他、村神や民俗神など、カリに同一視された様々な変容を遂げた女神が仮設の祠のパンダルで祀られる。これはある意味で「逆サンスクリット化」であり、土地の土着性の表出である。ポンチョムンダ・カリなど血の供犠を受ける女神のパンダルに緑の葉を蓄えた木などが吊るされ森が表現されている点などは、一時的にせよ供犠を受容する「ケガレの聖」（関根 1991: 125）の創出、「野生化」（臼田 2006）が志向されているようにも見える。カリガトとチェトラの双方の神観念の交代や変貌は、共に祭祀の間だけの一時的なことであり、祭りが終われば再び元に戻る。むしろ、チェトラとカリガトはセットをなして、植民地化以前の土地の力を体現し、始原の場に戻そうとしているのかもしれない。カリプジャを行うチェトラとカリ女神を祀るカリガトは、共にカリという女神を共通の基盤に持って、様々な女神を混淆・融合する。カリ女神にこだわる二つの地区はかつてのガンジスの本流の両岸に位置し、都市化や近代化に抗する力を儀礼によって表出しているとも言える。こうした表象を可能にするのは、ヒンドゥーの神が流動的であり、時にはアヴァターラ（化身）として変容し、時には神々の中に複合的重層的な神々を包摂するからであろう。それは、ブラーマン風言えば、一即多、多即一の原理、あるいは本質は外観より力であるとの観念によって変容すると言える。神観念の変容や神像の姿形の変異は多様であると共に単一になるのである。

また、別の推論を立てるとすれば、チェトラは東側に隣接するカリガトでカリがロッキに変容することで不在となって生じる真空状態を、シャクティの連続性に基づいて、自らの土地に呼び込んで供犠の女神として祀ることで、土地神の機能を代替させ祭祀の連続性を維持するのかもしれない。カリガトとチェトラは聖なる河で東西に分離しているように見えながらも、土地神を祭祀する点では共通の基盤の上に立っており、相互補完の関係にある。チェトラの場合は、明らかに「地域性」(locality)の復権があり、それに基づいてパラと呼ばれる「近隣関係」(neighborhood)を再構築するために女神祭祀が



機能している。チェトラ商人組合は貨幣経済を生業の糧として生きる人々の生活空間であり、カリプジャの間も異なるパラ同士にはある種のライバル関係が見出される。しかし、チェトラ商人組合は地区(ward)の外部に対しては、これを「チェトラのカリプジャ」として内と外の差異性を喚起し、地域起こしの祭礼として表現し発信している。現在では、この活動を州政府野党の政治家はうまく利用して、貧困層の多いチェトラの住民の支持を得ようと試みている。

コルカタの他の地域のドゥルガプジャは、現在ではグローバル化の影響を受けて派手なコラボレーションによって時には煌びやかな造形を作り出すのに対して、チェトラがひたすらカリの造形を変えずに「憤怒のカリ」など、彼らが考える「原像」を維持しようと努力するのは、他の地区との差異化を顕在化させることで自らの地区を小宇宙にして、独特の感情や雰囲気を高揚させ共有しようとする強い意志があるためであろう。

チェトラはカリガトの西隣に位置し、初代インド総督の屋敷跡があったことに見られるように、強力な植民地支配の根拠地であった場所であり、居住者は潜在的に支配者に対してソフトな抵抗を試みる体験を積み重ねてきた。カリ女神は時に土地神や村神と習合して土地の原初の力を維持し、「盗賊」、「供犠」、「タントラ」など暴力性や異端性など負とされてきた側面を逆に活力に転化しようと試みてきた。植民地時代から今日まで概してネガティブな側面とされてきたものへの関与は、過去の反植民地化の記憶を現代のカリプジャの中に甦らせて新たな原動力に変えようとしているのかもしれない。外部から押し寄せるグローバル化の流れに抵抗することは難しく、チェトラでも神像の造形の一部には影響を与えている。しかし、一時的にせよ流行に流されずに、外部の流れを食い止める祝祭空間を創出したいというチェトラの人々の思いが、神像の制作に凝縮して溢れ出ている。1990年代初期にインド経済が自由化され、政治の流れがヒンドゥー至上主義に傾く中で、チェトラに一時的に成立する独自の祝祭空間がどのような変貌を遂げてきたのか、基盤となる社会構成の変動も含めて更に考察を進めていく必要がある。

#### 注

- 1) 「カルカット」は植民地時代の他称で、2001年に正式に「コルカタ」に改称された。
- 2) 現在、儀礼を組織する集団にカーストに関する名称が用いられることはない。英語で表記する場合、コミュニティやクラブなどが用いられる。ベンガル語で表記される場合、次のようになる。সর্বজনীন (シヨルボジョニン: 全ての人々の)、কমিটি (コミッティ: comittee)、সমিতি (シヨミッティ: comittee)、ক্লাব (クラブ)、সংঘ (シヨンゴ: 参賀)、পল্লি (ポッリ: quarter, locality)。
- 3) クモルトウリの主な住人は、17世紀の半ばにベンガルの地方都市クリシュノノゴルなどから移住してきたクモル(あるいはクンボカルকুম্ভকার: 土製の壺などを作るジャーティ)で、18世紀末から神像制作を行っているといわれる。クモルトウリに続いて多くの神像制作を行う職業集団としてポトゥアが知られるが、「ポトゥア」とは元々は絵描き、絵語り、神像造りを専門とするムスリムを含むジャーティで、壺作りを専門とするクモルとは区別されている(金 1992: 154)。クモルトウリとポトゥアバラに関する詳細は稿を改める。
- 4) 土で作られた像は、最初から神であるわけではない。そこで覚醒(বোধন: ボドン)と歓迎(বরণ: ボロン)の儀礼を行い、神として招かれる。
- 5) ドゥルガプジャは概してナワラトリー(9日間の夜の祭礼)と呼ばれている。消費社会との結びつきが強く、特に現在ではドゥルガプジャの前に衣類やアクセサリを新調することが勧められており、時期が近付くと衣食住に関する広告が街の掲示板や新聞、テレビ、ラジオ、携帯メールを含めた電子メディアを彩る。
- 6) 今日の都市祭礼の形式としては明らかにドゥルガの方が早い。ドゥルガが常設寺院をほぼ持たないのに対して、コルカタには無数のカリ女神の祠や寺院があるという特徴もある。

- 7) 「シヨルボジョニン」とはヒンディー語の「サルヴァジャニン」である。西インド、マハーラーシュトラ州では、ガネーシャの像を用いたガネーシャ祭礼が行われる。「サルヴァジャニン」とは、19世紀後半の独立運動の高揚を背景に、ガネーシャ祭礼に導入された用語や組織が、ベンガルにも導入されたものである(小磯2008)。
- 8) ドッキナ・カリ (दक्षिणा काली) とは字義通りには「南方の女神カリ」との意味である。コルカタ市を北上したドッキネッショル・カリ寺院(常設寺院)のカリ女神(別名ボボタリニ)と同様の型である。現在の寺院は、1855年にラニ・ロシュモニ(1793-1861)が建立したものである。この型の起源については明らかでないが、ドルドによれば1400～1600年頃に成立したMahabhagavata Puranaにその描写がある(Dold 2005)。
- 9) シヤマ・カリ (श्यामा काली) とは「夜の女神カリ」との意味である。
- 10) ドシュモハビッダ (दशमहाविद्या) とは「10の偉大なる女神」との意味である。10体にはそれぞれ名前がある。カリ、タラ、シヨロシ、プバネッショリ、ポイロピ、チンノモスタ、ドゥマボティ、ボゴラ、マタンギ、コモラである。
- 11) ショッシャン・カリ (श्राशान काली) とは「火葬場のカリ」との意味である。
- 12) ドゥルガについては、彼女の子供とされるゴネシュ(ガネーシャ)、ロッキ(ラクシュミー)、シヨロシヨッティ(サラスワティ)、カルティックの4神の像が、ドゥルガと同じ台の上で作られるか、別々に作られるかという違いもある。
- 13) コルカタ中部のパワニプル・ピーナス・クラブの神像は、ドッキナ・カリ型を基礎に全身を銀色の皮膚と飾りで包むものであった。
- 14) ドゥルガブジャに関しては、*Saptahik Bartaman* (週刊ゲンダイ) 紙や地元紙などのメディアを中心に、コルカタ都市圏の有名なコミュニティなどについて詳細に紹介している。ドゥルガブジャとジョゴダットリブジャではバンダルの巡礼マップが作成されるが、カリブジャは作らない。
- 15) ハワー・マハル(風の宮殿)は、ラージャスターン州ジャイプールの観光地として著名。
- 16) 例えばChaltabaganのコミュニティの寺院は繊細である。
- 17) 21 Palli Club
- 18) Hatibagan Sarbajjanin
- 19) Pratapaditya Road Tricone Park
- 20) Salt Lake BE Block, Khiderpore Palli
- 21) Salt Lake BG Block
- 22) Dumdum Park Bharat Cakra
- 23) Barisha Tarun Tirtha
- 24) 西ベンガル州は農村部を中心として毛沢東派の支持者が多いといわれ、マオイストは、コルカタの大部分のメディアにおいて、列車や他の政党(州政府与党インド共産党や野党草の根会議派など)の部署に対して「テロ」を仕掛ける集団として表象されている。ただし、論者にはその実態が明らかではない。
- 25) ただし、西ベンガル州フグリー県チャンダンナガルのジャガダットリブジャには、100以上にのぼるコミュニティの資金を負担する、「セントラル・コミュニティ」が存在するという(McDermott 2009: 207)。マックデモットによると、これは、クリシュナナガルのジョゴダットリブジャやコルカタのドゥルガブジャに対抗して、チャンダンナガルの人々が組織したものである。
- 26) 都市をミクロに捉える難しさについてはしばしば問われてきたが、奥田道大(2004)はそれを越境者たちが集まる大都市インナーシティに、関根康正(2006)はストリートに見出している。
- 27) ただし、先行研究においてマックデモットが記していたように、チョンドンノゴルのジョゴダットリ女神にプリマー(おばあさん)と呼ばれる供犠を捧げられる女神が礼拝されているとされる。
- 28) ポンチョムンダとは、字義通りには「五つの頭の女」という意味になる。最も近い語としては、ヒンディー語でパンチャムンダ・アサナと呼ばれる、タントラの行法において用いられる「五つの動物の頭蓋骨を用いて拵えられた座」の名称がある(McDaniel 2004: 37)。パンチャムンダとは神格の名前ではなく、民俗神ポンチャノンドとの関わりもない。ソシユールの概念に従えば、シニフィアンとシニフィエの連合関係から、カリ女神や民俗神ポンチャノンド、5体の女神、タントラの儀礼、五大元素などを結びつけている。
- 29) この竹の柵は、山羊の生贄が捧げられる時にだけ解体され、供犠が終わると再び設置された。2008年コルカタ

市郊外北部ダムダム地域で見たカリプジャでは、バラモンの男性司祭であったが、女性たちがアシスタントをしていた。チェトラのチンノモスタ・カリを祀るバンドルは、竹の柵があるだけでなく、「女人禁制」と明記されている。

- 30) 2006年のクモルトゥリのカリプジャ、2008年のコルカタ市外北部ダムダムで参加したカリプジャでは、男女関わりなく礼拝者たちの手に渡された花びらは、彼女らの手で女神像に投げられた。

#### 参考文献

- Banerjee, Sudeshna, 2004. *Durga Puja: Yesterday, Today & Tomorrow*, New Delhi: Rupa.
- Chaliha, Jaya and Gupta, Bunny, 2005(1990). "Durga Puja in Calcutta" In Sukanta Chaudhuri (ed.), *Calcutta: The Living City*, New Delhi: Oxford University Press.
- Dasgupta, Sasibhusan, 2002(1960). *Bharater sakti sadhana o sakti sahitya*, Kolkata: Sahitya Sansad.
- Dirks, Nicholas B. 2006. *The Scandal of Empire: India and the Creation of Imperial Britain*, New Delhi: Harvard University Press.
- Dold, Patricia, 2003. "Kali the Terrific and Her Tests: The Sakta Devotionalism of the Mahabagavata Purana", In Rachel Fell McDermott and Jeffery J. Kripal (ed.), *Encountering Kali: In the Margins, at the Center, in the West*, Delhi: Motilal Banarsidas, pp. 39-59.
- Dutta, Abhijit, 2003. *Mother Durga: An Icon of Community & Culture*, Kolkata: Tandrita Chandra Readers Service.
- Fuller, C. J., "Misconceiving the grain heap: a critique of the concept of the Indian jajmani system", pp. 33-63. In M. Block and J. Parry, *Money and the Morality of Exchange*, New York: Cambridge University Press.
- Gupta, Sanjukta, 2003. "The Domestication of a Goddess: Carana-tirtha Kalighat, the Mahapitha of Kali", In Rachel Fell McDermott and Jeffery J. Kripal (ed.), *Encountering Kali: In the Margins, at the Center, in the West*, Delhi: Motilal Banarsidas, pp. 60-79.
- McDaniel, June, 2004. *Offering Flowers, Feeding Skulls: Popular Goddess Worship in West Bengal*, New York: Oxford University Press.
- McDaniel, June, 2009. "Sitting on the Corpse's Chest: The Tantric Ritual of Sava Sadhana and its Variations in Modern Bengal", In Cynthia Ann Humes and Rachel Fell McDermott (ed.), *Breaking Boundaries with the Goddess: New Directions in the Study of Saktism*, Delhi: Manohar Publishers & Distributors, 103-135.
- McDermott, Rachel Fell, 2001. *Mother of My Heart, Daughter of My Dreams: Kali and Uma in the Devotional Poetry of Bengal*, New York: Oxford University Press.
- McDermott, Rachel Fell, 2009. "A Festival for Jagaddhatri and the Power of Localized Religion in West Bengal", In Cynthia Ann Humes and Rachel Fell McDermott (ed.), *Breaking Boundaries with the Goddess: New Directions in the Study of Saktism*, Delhi: Manohar Publishers & Distributors, 201-222.
- Menon, Usha and Shweder, Richard A., 2005. "Dominating Kali: Hindu Family Values and Tantric Power", In Rachel Fell McDermott and Jeffery J. Kripal (ed.), *Encountering Kali: In the Margins, at the Center, in the West*, Delhi: Motilal Banarsidas, 80-99.
- Niyogi, Tushar K., 1987. *Aspects of Folk Cults in South Bengal*, Howrah: M/s. Roman Printers.
- Rodrigues, Hillary Peter, 2003. *Ritual Worship of the Great Goddess: The Liturgy of the Durga Puja with Interpretations*, New York: State University of New York Press.
- Sarkar, Benoy Kumar, 2004(1917). *The Folk Element in Hindu Culture: A Contribution to Socio Religious Studies in Hindu Folk Institutions*, New Delhi: Oriental Books Reprint.
- Srinivas, M. N., 1987. *The Dominant Caste and Other Essays*, New York: Oxford University Press.
- Thomas, C. Frederic, 1997. *Calcutta Poor: elegies on a city above pretense*, New York: M. E. Sharpe.
- Urban, Hugh B., 2003, "India's Darkest Heart: Kali in the Colonial Imagination", In Rachel Fell McDermott and Jeffery J. Kripal (ed.), *Encountering Kali: In the Margins, at the Center, in the West*, Delhi: Motilal Banarsidas, pp. 169-95.
- アバデュライ・A. 2004 『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』平凡社 Appadurai, Arjun, 1996. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

- 粟屋利江 1998 『イギリス支配とインド社会』 山川出版社
- 白田雅之 2006 「ハオラ県の村の神」『コランニ18号—特集南アジアの民間信仰』 コランニ編集部 pp. 92-110.
- 奥田道大 2004 『都市コミュニティの磁場』 東京大学出版会
- 金基淑 1992 「二つの水, jalとpani—ヘンド・ベンガル地方のボトゥア・ジャーティの生業と宗教」『民族学研究』 57(2).
- 小磯千尋 2008 「マハーラーシュトラの祭礼と芸能の再生—ガネーシャ祭礼とタマーシャー」 鈴木正崇(編)『神話と芸能のインド』 山川出版社
- 小谷汪之 1986 『大地の子—インドの近代化における抵抗と背理』 東京大学出版会
- 澁谷俊樹 2008 「南コルカタのチェトラにおけるカリ女神祭祀の特異性に関する文化人類学的研究」『文明研究』 27, pp. 39-61.
- 関根康正 1991 『ケガレの人類学』 東京大学出版会
- 関根康正 2004 『宗教紛争と差別の人類学—現代インドで「周辺」を「境界」に読み替える』 世界思想社
- ターナー・ヴィクター 1981 『象徴と社会』 紀伊國屋書店 Turner, Victor, 1969. *The Ritual Process: Structure and Anti-structure*. Chicago: Aldine Publishing Company.
- 田中雅一 1988 「カーリー女神の変貌—スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の研究」『国立民族学博物館研究報告』 13(3).
- 田中雅一 2005 「多民族社会における宗教—シンガポールのヒンドゥー教をめぐって」『人文學報』 92, pp. 1-39.
- 外川昌彦 2003 『ヒンドゥー女神と村落社会—インド・ベンガル地方の宗教民俗誌』 風響社
- 外川昌彦 2008a 「創られた『ヒンドゥー教』—ベンガルのチャイタニヤ伝における“Hindu”の用法について」『宗教研究』 82(1), pp. 25-46.
- 外川昌彦 2008b 「水牛の姿をした魔神を殺す女神—ベンガルにおけるドゥルガ女神祭祀の諸相」 鈴木正崇(編)『神話と芸能のインド』 山川出版社
- 中谷哲弥 2010 「インド・デリーにおける近隣関係の構築と都市化・再開発—ベンガル人避難民コロニーを事例として—」 三尾稔(編)『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究』 平成18年度～平成21年度 科学研究費補助金 研究成果報告書
- バブコック・バーバラ・A. 1984 『さかさまの世界—芸能と社会における象徴的逆転』 岩波書店 Babcock, Barbara A. 1978. *The Reversible World*, New York: Cornell University Press.
- 三尾稔 2006 「『創造』される『伝統的』都市祭礼とヒンドゥー・ナショナリズム—インド・ラージャスターン州ウダイプル青年団体の活動を中心として」 三尾稔(編)『北・西インドにおける都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究—経済自由化, 宗教ナショナリズムと宗教実践との相互連関の民族誌的把握を目指して—』 平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金 研究成果報告書
- 八木祐子 2006 「ワーラーナシーにおける都市祭礼の変化—ドゥルガー・プージャーを中心に—」 三尾稔(編)『北・西インドにおける都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究—経済自由化, 宗教ナショナリズムと宗教実践との相互連関の民族誌的把握を目指して—』 平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金 研究成果報告書
- 山口昌男 1975 『文化と両義性』 岩波書店